

「地域に根ざし、100年続く経営作り」

—伝統的技術の継承と先進的技術の融合—

有限会社高田牧場（肉用牛肥育経営・大分県豊後高田市）



(写真1) 経営主 高志さん(写真中央)右隣 父光則さん

地域の概況

豊後高田市は、大分県の北東部、国東半島の西側に位置し、豊かな自然と温暖で過ごしやすい瀬戸内式気候に属しており、「国東半島・宇佐地域」のクヌギ林とため池によって持続的に維持されている原木しいたけ生産をはじめとする「循環型の農林水産業」の営みは、世界農業遺産にも認定されている。

地域の農業では、平坦地域は米麦を中心に白ネギ、いちご、菜花、花きなどの園芸作物が栽培され、丘陵地帯には肉用牛団地や柑橘畑、ブロイラーの産地が形成されており、干拓地における白ネギは西日本でも屈指の一大産地を形成している。肉用牛は29戸あり、特に肥育牛は県内最大の産地となっている。

(表1) 経営実績（令和3年）

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)		家族・構成員	4.1人
	雇用	従業員	雇用・従業員	3.7人
飼料生産	実面積		2,545 a	
肥育牛 平均 飼養頭数	肉用種		18.0頭	
	交雑種		1,116.5頭	
	乳用種		-頭	
年間 肥育牛 販売頭数	肉用種		7頭	
	交雑種		620頭	
	乳用種		-頭	
収益性	所得率		5.0%	
	出荷肥育牛1頭当たり生産費用		600,673円	
生産性 (交雑種・肥育タイプ)	肥育 (品種・肥育若齢)	肥育開始時	日齢(月齢)	54.9日
		体重	86.3kg	
		肥育牛 1頭当たり	出荷時	676日
			出荷時生体重	703.6kg
	平均肥育日数		621日	
	販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)		0.994kg	
	対常時頭数事故率		1.07%	
	販売肉牛1頭当たり販売価格		666,531円	
	販売肉牛生体1kg当たり販売価格		947円	
	肉質等級4以上格付率		14.3%	
生産性 (黒毛和種・肥育タイプ)	肥育 (品種・肥育若齢)	肥育開始時	日齢(月齢)	5.9日
		体重	35.8kg	
		肥育牛 1頭当たり	出荷時	820.9日
			出荷時生体重	657kg
	平均肥育日数		815日	
	販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)		0.762kg	
	対常時頭数事故率		5.6%	
	販売肉牛1頭当たり販売価格		1,004,845円	
	販売肉牛生体1kg当たり販売価格		1,529円	
	肉質等級4以上格付率		100.0%	

(表2) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和45年	肉用牛肥育 (黒毛和種)	10頭		・12月より、祖父が肉用牛肥育(黒毛和種)を開始 ・(有)高田牧場として4戸で経営を開始(各戸10頭規模:牛舎4棟)
昭和52年	肉用牛肥育 (乳用種)	50頭	・トウモロコシ (3ha) ・イタリアンライグラス (3ha)	・父(32歳)は、民間会社を退職し、就農。牛舎1棟を新設。 ・(有)高田牧場は、1戸離農3戸の体制となった。
昭和57年～63年	肉用牛肥育 (乳用種)	300頭	・トウモロコシ (3ha) ・イタリアンライグラス (3ha)	S57 育成牛導入からヌレ子での導入に変更し増頭を図る。 S62 牛肉・オレンジ輸入自由化の中、国際化を見据え、アメリカ研修で10万頭の牧場を視察。 S63 祖父より父(42歳)へ経営移譲。
平成2年～13年	肉用牛肥育 (交雑種)	400頭	・トウモロコシ (3ha) ・イタリアンライグラス (3ha)	H5 (有)高田牧場の組合員2戸が廃業し、1戸1法人の形態となる。 H13 BSEにより、乳用種の枝肉価格が暴落したため、今後、高い利益率が見込める交雑種へと経営方針を切り替えた。
平成14年～30年	肉用牛肥育・一部繁殖 (交雑種・黒毛和種)	1,000頭	・稲WCS (16.3ha) ・飼料用米 (5 ha) 合計: 21.3ha ・放牧地: 20ha ※放牧 (バヒアグラス 3 ha)	H16 経営主(28歳)が、民間会社を退職し、就農。 H21 山口型放牧を視察し、地域の荒廃地の解消を目的に、水田放牧を開始。 H23 豊後・米仕上牛販売拡大協議会設立。初代会長となる。 H30 父より経営主(42歳)へ経営移譲。
令和元年～令和3年・現在	肉用牛肥育・一部繁殖 (交雑種・黒毛和種)	1,200頭	・稲WCS (16.3ha) ・飼料用米 (8.3ha) 合計: 24.6ha ・放牧地: 20ha ※放牧 (バヒアグラス 10ha)	R3 父は、11月に畜産並びに地域貢献が認められ、黄綬褒章を受章。 R4 10月に農場HACCP認証取得。 現在 飼養頭数1,200頭、牛舎15棟、堆肥舎3棟。

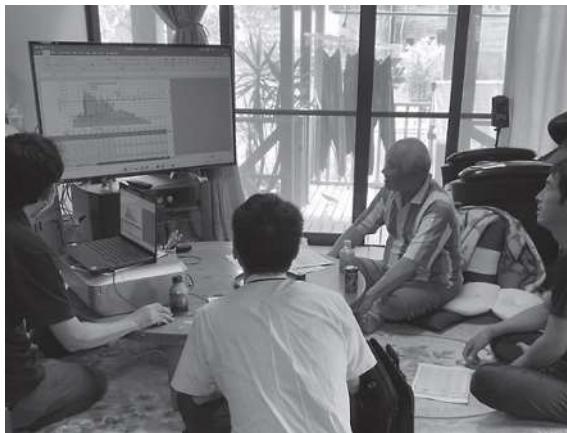
経営・活動の推移

有限会社高田牧場は、昭和45年に祖父が仲間3人と計40頭の黒毛和種の肥育経営を開始し、昭和63年に父の光則さんへと引き継がれ、平成30年に現在の経営主の高志さんが継承した。

父は、牛肉・オレンジ輸入自由化が大きな社会問題となっていた昭和62年に、アメリカの農場視察に参加し、10万頭規模の農場を目の当たりにし規模拡大で高い収益が確保できると確信を得た。順調に規模拡大を図ってきた中、平成5年にもと畜費や飼料費の上昇など、経営を取り巻く環境が悪化したこと、共同経営者であった2名が離農に追い込まれ、その資産・負債を引き継いだことや、平

成13年のBSE発生による枝肉価格の暴落という大きな2つの経営危機を経験した。父は就農して以来、コスト削減や省力化、肉質の向上などの経営シミュレーションを重ね農協や行政機関、税理士などの協力を仰いで資金調達を行うなど、もと畜価格の暴落を逆手にチャンスと捉え、肉質面でより国際競争力がある、それまでの乳用種肥育から高い利益率が見込める交雑種肥育へと一気に切り替える決断をした。現在の牛舎15棟で交雑種飼養頭数、1,200頭規模経営の礎となっている。

本牧場は、地域や関係者の信頼を大切にすること「地域に根ざし、100年続く経営作り」を経営理念とし、新しい時代にも耐えうる持続可能な経営を目指すことを心がけている。



(写真2) 経営検討会

経営・技術の特色等

【生産基盤強化】

(1) 規模拡大による高い収益性の確保

現在の常時飼養頭数1,135頭は、交雑肥育経営としては、飼養規模や収益性において県内トップクラスの肥育経営体である。

経営の特色は、まず交雑種雌牛肥育であり、肥育回転率向上に向けて22か月齢での早期出荷を行っており、令和3年の肥育回転率は

55.2%となっている。

次に、県普及員の指導の下に作成した管理システムで経営シミュレーションを行い、設備投資のタイミングや運転資金等の借り入れに活用し、安定した収益の確保に努めている。

(2) 生産コスト低減の取り組み

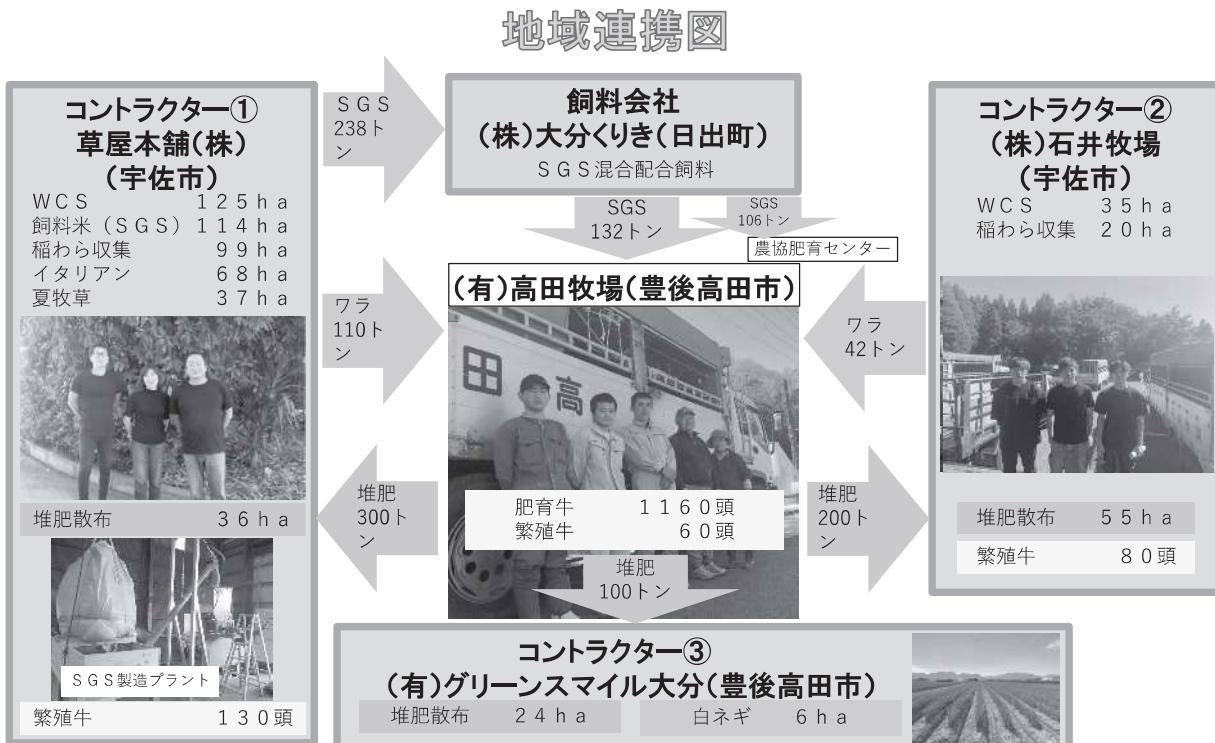
経営の特色として、出荷牛1頭当たりの購入飼料費の低コスト化である。

配合飼料については、地域のコントラクターや飼料関連会社と連携して、飼料用米・飼料用米SGS、食品製造粕を混合した農場特注の飼料を製造している。

特注飼料については、地域のライスセンターなど大規模コントラクターとも連携を取り、飼料用米や飼料用米SGSを確保して『豊後・米仕上牛』のブランドを確立している。また、国産飼料の活用は、国際情勢で大きく変動する配合飼料価格の安定にもつながっている。

自給飼料生産については、稲WCS・飼料用米、バヒアグラスを延べ34.6ha作付けし、

(図1) 地域連携図



稻わらもたい肥交換を行いながら20haの収集を行っている。粗飼料は哺乳期の購入乾草を除き自給できており、出荷牛1頭当たりの購入飼料費は、『経営診断全国集計』と比較して8割程度に低減されている。

【「豊後・米仕上牛」の販売戦略】

(1) 豊後・米仕上牛販売拡大協議会の設立

平成23年、父が中心となり、飼料用米を利用している地域の牧場2件と一緒に、ライスセンター、飼料会社、食肉卸業者、小売店、行政機関なども参加した「豊後・米仕上牛販売拡大協議会」を設立した。

飼料用米を200kg以上食べて育った牛を「豊後・米仕上牛」と命名して商標権を取得し、新たなブランドとして立ち上げた。

現在では県内の有名老舗スーパーの主力商品として、年間400頭が販売されている。

(2) 高付加価値化・高品質化

飼料用米の給与は、オレイン酸などの不飽和脂肪酸が高まり、脂肪の質が向上すると言

われている。交雑牛特有のほどよい霜降りの赤身肉は、最近の健康・食味志向とマッチしており『豊後・米仕上牛』は、地域で生産された飼料米の給与や、生産者の顔が見える、安全・安心な食肉として最近ではレストランでの利用も拡大している。

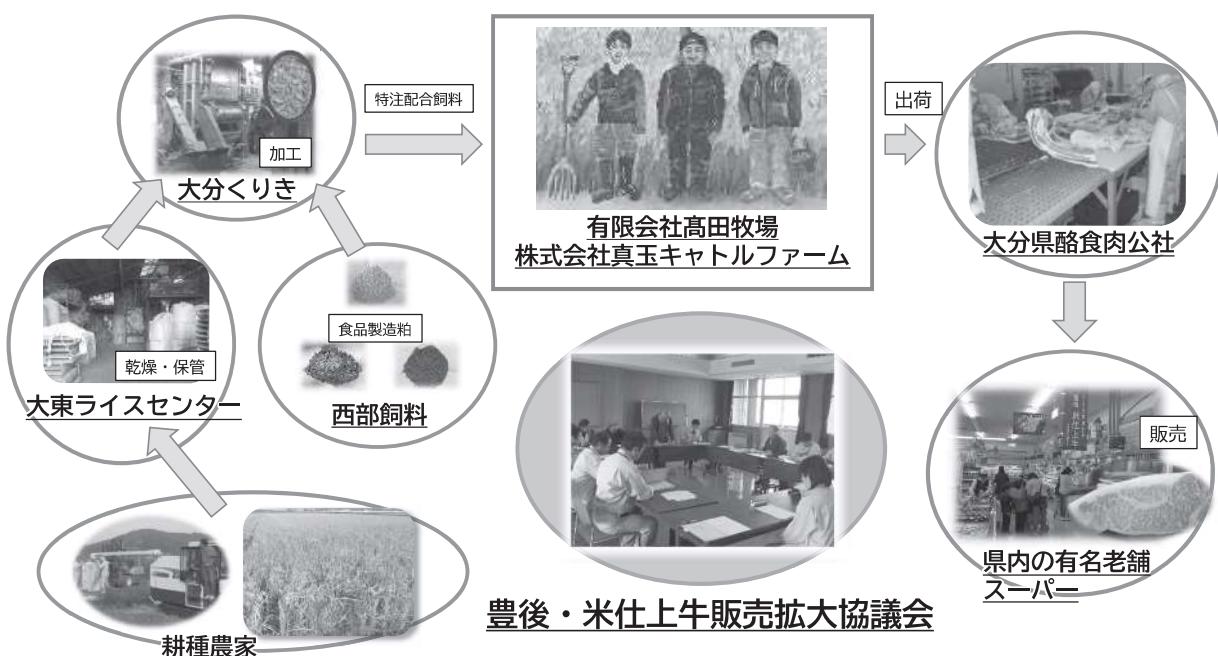
こうした畜産物の高付加価値化の取り組みが評価され、令和2年度「飼料用米活用畜産物ブランド日本一コンテスト」で公益社団法人中央畜産会会長賞を受賞している。

また、大阪市食肉市場で開催された第55回農林水産祭参加行事第35回全農肉牛枝肉共励会で最優秀一席を受賞するなど、数多くの品評会で好成績を収めている。

【農場HACCPの取り組み】

規模拡大に伴い増加傾向にあった死亡廃用牛対策や、従業員の飼養管理技術の向上、消費者に対する「豊後・米仕上牛」の安全・安心の理解醸成として、平成29年8月から農場HACCP認証への取り組みを決意した。

(図2) 豊後・米仕上牛の流れ



毎月、場内会議や勉強会を行うことで従業員の意識改革、事故率の低減、枝肉成績の向上、ICT機器等の省力化が実現できている。特に事故率の低減と枝肉成績の向上に効果が出ており、年間死亡率は1%に低減し、枝肉成績としてはロース芯面積や枝肉重量が増加した。

令和4年10月6日に農場HACCP認証を取得しました。

地域に対する貢献

【耕畜産連携による持続可能な肥育経営】

生産堆肥は地域の営農組織との契約による稻わらとの交換や、地域の園芸農家や地域おこし団体などへの販売により、全量を地域の農地に還元し、持続可能な農業や地域おこし団体が関係する観光業の発展の一因となっている。

【地域の荒廃農地並びに共有林を利用した放牧】

「国東半島・宇佐地域」は、世界農業遺産に認定されていることもあり、市では、自然景観維持の活動に力を入れている。こうした中、地域の荒廃農地15haと共有林5haにバヒアグラスを作付けし、林間放牧を行うことで自然景観の維持に貢献している。また、放牧地にはため池があり、毎年、地域の青年有志に周りの草刈りを行ってもらっている。御礼として「豊後・米仕上牛」を提供している。放牧地のため池での自然景観維持活動を通じて、地域との連携も図っている。

【食育活動】

市内の小・中学校では、食育事業の一環として毎月1回「食育の日」を実施しており、小学校のPTA役員でもある経営主は、「食育の日」に合わせて地域の小学校へ「豊後・米仕上牛」を提供し、生徒に畜産業への理解や命の大切さを伝える活動も行っている。



(写真3) 食育活動

【ふるさと納税品】

「全国トップレベルの子育て支援」を掲げる市は、その財源としてふるさと納税に力を入れており、園芸作物や柑橘類など市内で生産される多くの農産品が返礼品にラインアップされている中、「豊後・米仕上牛」は抜群の人気を誇っており、市の財源確保に大きく貢献している。

女性の活躍・働きやすい職場環境作りの取り組み

【女性の活躍】

法人構成員の4名のうちの2名が女性(母、妻)である。

母は、特に観察が重視される哺育部門と会計事務も担当している。当牧場の経営の基礎となる哺育部門として重要な役割であり、現在の経営に至ったと強く感じている。

妻は、原則、母と同じ勤務時間、勤務内容で、現在は子育てのため補助的な仕事をしているが、将来母の後継者として活躍を夢見ていている。

【高田牧場の働き方改革】

(1) 労働環境と福利厚生等

本牧場は、働きやすい環境を目指し母と妻は家事を考慮し1日5.5時間勤務し、2名の従業員は1日8時間勤務とし2週に3日の休日を確保している。

労働環境の更なる改善に向けて、「くにさ



(写真4) 家族写真※4代目の後継者予定（左から3番目）

き西部ヘルパー利用組合」を月に20日程度利用している。ヘルパー組合は平成15年に発足した大分県では初となる定休型ヘルパー組織であり、設立に尽力した父が組合長を務めている。

さらに、シルバー人材センターを月10日程度利用することで、全員が計画どおり休日が取得できており、今後益々労働環境、福利厚生の向上に努めたい。

また、牧場に携わる全員が、創意工夫し実践して得た利益は、決算手当として従業員に還元している。

将来の方向性

将来の方向として「地域に根ざし、100年続く経営作り」の基本的な経営理念を保ち、それを実現するために「経営基盤の強化」、「豊後・米仕上牛」の販売戦略、「農場HACCPの取り組み」を軸にして、4代目の後継者に経営をバトンタッチすることを目標としている。

本牧場を持続可能な経営とするため、1,500頭まで拡大を行う計画を持っている。今後新たな雇用確保、自動給餌器の導入など、従業

員の働き方も見直しを行っていく。規模拡大に伴う肥料処理は、ペレット化による広域流通の取り組みも視野に入れている。

さらに地域の荒廃農地を活用し、放牧地を30haまで拡大することで、黒毛和種繁殖雌牛を50頭まで増頭し、和牛の一貫生産の強化を図るとともに、飼料コスト削減に向けて、地域との更なる連携を図っていきたい。

また「豊後・米仕上牛」についても、食肉卸業者と協力し、東京・大阪への販路拡大や自動販売機による販売も検討をしていきたい。

最後に、農場HACCP認証の取得後は、「豊後・米仕上牛」のPRにも活用し、飼養衛生管理を徹底強化することで、本牧場の更なる発展を図っていくこととしている。